

プロセス・シラバスに関するリサーチ ーこれはアクション・リサーチと言えるのか？ー¹⁾

横溝 紳一郎

A Research on Process Syllabus: Is This an Action Research?

Shinichiro YOKOMIZO

はじめに

1999年4月に始まった日本語教育学の授業(大学院生対象)にプロセス・シラバス²⁾を導入したが、あまり満足な結果を得ることが出来なかった。その結果を受けた反省に基づいて、続く1999年10月からの授業(履修者はほぼ同じ)で、同じプロセス・シラバスにもう一度チャレンジした。以下時間の流れに従い、この更なる試みの進行(1999年10月から2000年2月まで)を見ていく。³⁾

改訂されたプロセス・シラバスの実施方法

(1) 10月4日

学期初めの授業で、オリエンテーションと交渉を行った。授業に先だって、先学期のプロセス・シラバス導入の方法とその成果と問題点を詳しく記述したプリントを配付し、先学期の出来事を思い出してもらっていた(8月と9月が休みだったため)。⁴⁾授業ではまず、学習項目の選定から取り掛かった。先学期同様、リストアップされた学習項目のどれを勉強したいかを挙手によって調べ(院生は何度でも手を上げていい)、学習項目を選んだうえで、先学期同様2週間に1項目を勉強していきたいという院生の意向を受け、次のようにスケジュールが決定した。

10/4 オリエンテーション、プロセスシラバスの説明、教室内の取り組みの参加・手順・学習内容の計画立て

10/11 振替休日

10/18と10/25 中上級の教え方

11/1と11/8 技能別の教え方(聴く)

11/15と11/22 4技能を統合する教え方

11/29と12/6 文法を教えるべきか、また文法を教えるときの教え方

12/13と12/20 評価法と言語学習

12/27と1/3 冬休み

1/10 成人の日

1/17と1/24 教科書分析

1/31と2/7 未定

その後、「発表回数を1人が一学期に2回にしたい」と院生全員が希望したので、それを了承した。発表する項目は、各院生に発表したい2つの項目のところで挙手してもらうことによって決定した。人数が多すぎたり少なすぎたりした場合は、院生同士の話し合いによって調整した。

授業の進め方と教師の役割については、3つの案が院生と私から出された。

「プラン1」：概論を院生が共同作業で担当、具体例を私が担当

「プラン2」：概論を私が担当、具体例を院生が共同作業で担当

「プラン3」：概論を私が担当、具体例を院生が(共同作業ではなく)分担して担当

どれがいいかについて、院生同士で10分ほど話し合いがもたれたが、プラン1とプラン2のどちらがいいかで意見が分かれ、決着がつかなかった(プラン3はほとんど支持されなかった)。そこで、10/18と10/25でプラン1を、11/1と11/8でプラン2を試してみて、11/8の授業終了後どちらを採用するかを決定することとなった。

評価についてはまず、先学期含まれていた「積極的参加」を評価項目から削除することになり、次のように決定した。

発表(30% X 2)、レポート(40%)

評価者については、交渉の結果、(1)「発表の準備」は院生の自己評価、(2)「発表の本番」は、発表しなかった他の院生(匿名)と私からのその発表についてのコメントに基づいて、院生が自己評価する、(3) レポートの評価は私、ということになった。「発表の本番」についての他の院生からと私からのコメントは、次のような形で発表者に与えられるこ

とになった。

1. 他の院生が「発表の本番」についてのコメントを私にE-mailで送る。
2. 送られてきたコメントを私が匿名にし、内容をまとめる。
3. 院生からのコメントの後に、私のコメントを付ける（匿名ではない）。
4. 出来上がったものを発表者全員にE-mailで送る。（1から4までを発表後3日のうちに行なう）

ところで、授業が終わった後で、評価項目と評価者は決まったものの、評価項目の下位項目と評価基準について話し合っていなかったことに気がついた。そこで、翌日に先学期のやり方（各下位項目についての評価基準を4段階の記述で表し、そのうちの1つを選択評価する方法）を印刷したプリントを配付して、その中に修正したいところがあれば、メールで私にその点を伝えるよう指示した。

(2) 10月18日

上記の評価項目の下位項目と評価基準のやり方の修正を望む院生はいなかった。そこで、今学期の評価に関しては、院生に配付したプリントに沿って行なうことになった。また、クラスの最終的な成績の決定は、先学期同様、学期末の各院生と私の話し合いによってなされることになった。院生全員に次のことを確認させた。

1. 「発表の本番」については、まず発表直後に自己評価を行なっておく。
2. クラスメイトと私のコメント（ともにE-mailを通して）を参考にして、自己評価をする。
3. 自分の自己評価の結果は発表毎に必ずしておき、きちんと保管しておくこと。

(3) 11月8日

授業の進め方（発表形態）についての話し合いが持たれた。プラン2で発表した発表者から、「トピックが絞れた」「トピックを決めて、興味をもって、すすめていけた」などのプラン2を支持する意見がでてきた。プラン1で発表した発表者からはプラン1を支持する意見は出てこなかった。そこで、プラン2を採用することになった。採用決定後、2週目に何についてするのかを、1週目の私の授業の終わりに時間をとって話し合いたいとの意見が出てきた。そこで、1週目の私の授業の最後に質疑応答の時間

を設け、その内容を2週目のトピックにつなげていくということになった。

(4) 11月15日～12月20日

学期当初の予定どおり、授業が進行した。また、1週目に私が概論的な説明などを担当し、2週目に院生が具体的な教室活動を担当するというシステムが確立した。2週目の学習者の発表に対する、他の院生と私からのコメントも、量・質ともに充実してきたように思う。以下、一例を挙げる。

【他の院生からのコメント】

- ・発表者の態度がとても良かった。落ち着いていて自信がある感じだけど、穏やかムード。
- ・TBLT(Task-based Language Teaching)について、さらに調べられていて分かりやすかったし、もっと詳しく知りたくなった。
- ・4技能の授業の教案をたてる活動は、他の人のアイデアなどが聞けておもしろかった。
- ・実際の授業に近くするために、文法項目の制限などがあってもよかったかも…。
- ・司会がうまかったと思う。てきぱきしていたし、みんなの反応を見ながら臨機応変に進めていたので、こちらも参加しやすかった。
- ・内容については、テーマが難しかったのかも知れないが、今ひとつ発表の焦点がぼやけていたような気がする。発表の中心は何なのか後にしてみるとよくわからない。でもタスク作りはとても楽しかった。
- ・先週の先生の講義の内容の中から、項目を絞って調べてくれたのは良かった。みんなの希望どおり、知りたいことを知ることが出来たと思います。
- ・4技能統合の具体的な実践例をあげてくれたのはよかった。これを実際の授業で一つのアイデアとして使用できるとおもう。
- ・4技能統合はメリットが多いということが、実例をみてよく分かった。
- ・4技能の統合について、何とか分かったように思った。
- ・結局、タスクを中心とした授業運営については、よく分からなかった。その点も、タスクを中心とした指導法が具体化していな

いことによるのだろうか？

- ・簡潔で、分かりやすかった。
- ・レジュメが分かりやすく、章立ての順序も良くて、内容が自然に頭に入っていた。
- ・TBLTについてもう少し知りたかった。
- ・「4技能の統合をしようと思えば教師は大変だなあ」とタスクを作ってみてよかった。
- ・全体的な流れはよかった
- ・4技能統合の具体例が挙げられたが、すぐ使えそうな例でよかった
- ・発表者はみんな落ち着いて発表していてよかった。
- ・先週先生が教えてくださったことをより詳しくまとめてくれたので、4技能統合について理解が深まった。
- ・今回の発表のおかげで、TBLTのことがだいぶ分かった。
- ・4技能の統合については漠然としていたが、この授業で具体的なイメージがつかめた。
- ・自分達で直接プランを立ててみたので、具体的な方法まで知ることができた

[横溝からのフィードバック]

- ・お疲れ様でした。ただの説明に終わるのではなくて、聞く側に実際に参加させてみるという意欲的な試みの時間があったと思います。司会の評判もよかったようですね。ひとつの反省点としては、既に皆さんも感じているように、TBLTという理解困難なものをどう扱うかがはっきりしていないままのチャレンジでしたので、それに対する評価がポジティブなものやネガティブなものに分かれた点でしょうか。私も含めてみんなで話し合っ、もっとつめておけばよかったですね。一番私が「いい」と思ったのは、やはり4技能統合の教室活動をみんなで考えてそれを共有した部分でした。4技能の統合の楽しさと難しさを参加者全員が感じる事が出来たと思います。私も負けないように、来週の授業を盛り上げてみます。では、また。

(5) 1月17日

授業の初めに、今学期の評価のし方を確認した。レポートの形式は先学期同様の形を採用して、次の

ように決定した。

1. レポートの量は、A4で2-3枚、3000字プラスマイナス1000字。
2. トピックは授業でカバーされた項目の中から、各自選択する。
3. レポートの提出期限は、2月7日とする。
4. 各下位項目の評価ができれば、最終的な成績を学習者と教師の話し合いによって決定する(話し合いは2月8日から10日を予定)。

(6) 2月7日~10日

2月7日に院生が提出したレポートを、私が評価した。翌日から、院生一人あたり15分程度をかけた、最終成績の交渉が始まった。「発表」についての院生自身の自己評価と、「レポート」についての私の評価を照らし合わせて、コースの最終評価を話し合いにより決定した。その際、院生の自己評価が低い項目に関しては、「なぜのように評価したのか」を質問した。同時に、レポートの内容についての私のコメント及びアドバイスを与えた。

新しい試みの結果

1999年4月からのアクション・リサーチでは、(1)学期を通して学習者が記入する内省ノート(ジャーナル)、(2)学期を通して教師がつける教授経緯記録とダイアリー、(3)学期末のアンケート調査、によってデータを収集した。しかしながら、今回の試みでは、色々なデータを収集するための時間が学期中にほとんど取れなかったため、データ収集を学期末のアンケート調査だけに頼ることになってしまった。今回の試みの結果を、アンケート調査(7段階のスケールと自由記述で構成されている)の結果の分析によって以下、考察していく。⁵⁾

アンケート調査の結果と内省

1. 「先学期の反省に基づいた話し合い」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	1	1	4	5

多くの院生が「先学期の反省に基づいてできた、新しい話し合いシステム」に満足しているという結果になった。このことは、院生による以下のコメントに現れている(カッコ内の数字は7段階評価で、

その院生がつけた点数。以下のアンケート結果についても同様)。

- ・事前に話し合っ決めていくことで、自分の意志が尊重されたような気がする。(7)
- ・自分達の授業なので、色々試行錯誤しながら、自分達の考えをまとめられるから。(7)
- ・先学期の反省をもとに改善して今学期に望むというのはいいことだと思う。発表も2回ずつと決まっし、授業形態も話し合いのおかげで変わり良かったと思う。(6)

「話し合い自体は意味があると思うが、それが授業の一部にはいつているのがもったいない。(4)」と、話し合いが授業の一部になっていることを不満に感じている院生が1名いたものの、この項目に関しては、先学期の反省がおおむね活かされたようだ。

2. 「発表者の決め方」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	1	1	3	6

今学期の「発表者の決め方」についても、多くの院生が満足しているという結果になった。院生は、次のようなコメントを書いていた。

- ・発表回数は評価とも関わってくるので、明確に決まっているまたは決めておくことが必要。(7)
- ・興味があるところを担当することで、知りたいという気持ちが生じ積極的に参加できた。(7)
- ・一つのテーマ担当の人数(4-5人)が決まられていて、少な過ぎず多過ぎずでよかった。(7)
- ・発表回数が少なくなったので、やりたいことを早めにはっきり決めることが出来た。(7)
- ・みんなの負担が平等になるのでいいと思う。(7)

「日本では、意欲や興味より、平等・平均が重視されるのかも。(6)」と、決め方を客観的に見つけた院生や、「評価法を考えると、このやり方の方がやりやすいと個人的には思います。1人2回ということについては、必ずしも自分がやりたいもの2つが(人数の関係もあり)選べたわけではないので、なんとも言えないと思う。(4)」と、発表の割り当てに心からの満足ができていない院生もいたが、強い反対意見などは見られなかった。この項目に関しても、先

学期の教訓を活かした試みが肯定的評価を受けたと判断してよいであろう。

3. 「授業の進め方・教師の役割の決め方」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	1	3	4	3

上述の「先学期の反省に基づいた話し合い」や「発表者の決め方」に対する院生の答えに比べると、若干低めの結果が出た。肯定的評価を与えている院生のコメントは次のようなものだった。

- ・両方のやり方をやってみてから決めるのが、一番悔いが残らない方法だと思う。(7)
- ・教師・学習者に過度の負担が行かないように授業を進めるためには、良い方法だと思う。(7)
- ・最初に両方の形をやってみることは、どちらの方がいいのかを知るために大切だと思う。(7)

以下の院生のコメントには、部分的な不満や当惑が垣間見えている。

- ・実験的な方法で良い方を決めるのは民主主義っぽくてよいが、自分達が試されているようで、内容を充実させるよりもそちらのプレッシャーの方が大きく、授業に行くのが億劫だった。(6)
- ・良い発表方法が探れてよかったが、決定までに1カ月かかり、時間がかかりすぎた気がする。(5)
- ・数字で評価するのは難しいが、自分たちがやりやすいほうを選べたのは良かったと思う。しかし、先生に決めてもらって、そのやり方でやるのも勉強になると思う。先生の考えを知りたい。(4)

部分的な不満や当惑を訴えているこれらのコメントの原因になっているのは、「授業の進め方・教師の役割」を10月4日の授業中の話し合いで決めることができずに、それから1箇月かけて試行錯誤の末に話し合いを持ち決定するというプロセスだったと思う。自分達でやってみて決めるという方法は民主的であり、プロセス・シラバスらしい方法であるが、その期間中に発表をする院生の心の中では、その発表が成績評価の対象となっていることもあり、様々な思いが交錯していたようだ。

4. 「評価の仕方」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	2	2	6	1

7段階スケールでの点数は、それほど悪くない結果がでた。肯定的評価を与えている院生のコメントは次のようなものだった。

- ・積極的参加については、誰が決めるか/どう決めるか等は問題ではないと思う。みんな頑張っているの、積極的参加という項目は必要ないと思う。(7)
- ・先学期のやり方よりはこちらの方がいいと思う。発表回数も決まっていて、分かりやすい。(6)

しかしながら、その一方で、決まった評価の仕方に完全には満足できていない院生からの提案が、以下のコメントに見られた。

- ・どの項目も主観的な判断による項目なので、1つは客観的な項目も設けたほうがよかったかも知れない。例えば「積極的参加」を出席率に読み替えるなど。(5)
- ・発表もレポートも同じぐらいの割合にして、発表者でないときの態度の評価（先生からの評価）を入れてもよいのではないかと思います。(5)

決め方そのものについて、少し心理的距離をおいて講評しているコメントも見られた。

- ・話し合った結果なのでよいと思う。ただ、私達は主導権を取ることに慣れていないので、別に先生が決めても、誰も文句を言わなかったと思う。(6)
- ・そのように話し合いで決まったので、良いと思う。他には思いつかない。(4)

「評価面への参加が院生側に抵抗が大きかった」という先学期の結果と比べてみると、先学期ほどの強い抵抗は院生には生じなかったようである。「評価の仕方について、学期初めに詳細に渡って、決定しておく必要がある」との先学期の反省を受けて、学期の最初の授業で、評価項目と評価者を決定した成果なのかも知れない。しかしながら、評価項目の下位項目・評価基準・最終的な成績の決定方法については、前述のとおり、最初の授業で決めることができなかった。それが原因かどうか分からないが、評価に参加すること自体に対しての抵抗が、院生の心のどこかにまだ存在しているのも事実だと思う。評

価については、アンケート調査の中で色々な角度から質問してみたので、その結果を詳しく分析することで、評価への参加に対する院生の反応を、以下明らかにしていく。

5. 「誰が評価をするのかについての決定」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	3	2	5	1

7点満点で4点をつけた院生が3名もおり、あまり肯定的評価を与えているとは言えない結果となった。肯定的評価を与えている院生のコメントは次のようなものだった。

- ・最初から決まっていたので良かった。(6)
- ・発表の準備と本番に分けて、評価者を別にしたのは妥当だ。準備段階では自分でどれだけ頑張ったか評価できるし、本番は、聞いている人が理解しやすくして満足できたかが重要だと思う。(6)
- 私の負担の大きさを心配するコメントもみられた。
 - ・評価する人はよいが、メールやノートをまとめる先生は大変だったのではないのでしょうか。(6)

自己評価の難しさを訴えたり、自己評価の信頼性についての疑問を挙げたりするコメントが、以下のように見られた。

- ・慣れていないので、違和感を感じた。「発表の本番」の評価については、他の人のコメントに否定的なものが一つでもあると、満点には自分ではしにくい。(6)
 - ・つじつまみたくないものは合っていると思う。しかし、自己評価・評価の実態がつかみきれていないと感じている。(5)
 - ・私としては自己評価できて救われる部分もあるかと思うが、それでいいのかなという思いも残っている。そもそも評価に学習者が関わるべきかどうか否かがまだ分からない。(4)
- 決定した評価の仕方以外の方法を提案するコメントも、次のように見られた。
- ・グループ発表なので、発表者のそれぞれが別々に評価されたらと思う。(5)
 - ・発表についても先生の評価を入れるべきでは？(4)

このように、院生のコメントには、戸惑いや迷い、

そして不満足が数多く見られる。「評価者となることは、その評価の最終的決断の責任者となるということであり、それに対する強い戸惑いや葛藤は、その責任の大きさを院生が感じていることの現れではないか」という、先学期の内省の内省が再び思いだされた。「自分自身の学習の評価に積極的に参加すること」に対する院生の抵抗は、自分が実際に評価を下す立場に立たされると、やはり大きくなるのである。先学期の反省を受けて色々試みた今学期でも、このことについては変わらなかったという結果になった。

6. 「評価項目の下位項目と評価基準」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	2	4	4	1

7段階のスケールで肯定的評価を与えている院生のコメントに、積極的支持があまり見られなかった。

- ・自己評価するのは初めてなので、これ以上のものは考えられないだろう。(6)
- ・多少主観的な判断も入るが、だいたい判断基準が全員同じになるような評価基準だと思う。(5)

一方、あまり肯定的でないコメントには、問題点の指摘や提案が具体的に含まれていた。

- ・発表に関しては、自分の意見にのみ基づいて、学生が勝手に決めてしまう可能性がある。(6)
- ・評価基準が明確なのはいいが、基準そのものについては、いいのか悪いのかよく分からない。(5)
- ・レポートに独自性のある意見や主張を入れるのは、ちょっと難しい気がする。(5)

「評価者となること」に対する抵抗が強いであろうことは、ある程度予想できたことだったが、「評価項目」や「評価基準」を決めることに対する抵抗もかなり強いことが分かった。私にとっては、予想外の結果となった。「評価項目の下位項目と評価基準についての話し合いが最初の授業で持たれなかったこと」がその一因であるのかも知れないが、評価への参加に対する戸惑いや抵抗が強いことをこの項目でも実感した。

7. 「発表の本番の評価方法」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	1	3	0	3	4

7段階のスケールの結果を見てみると、この項目での院生の答えは、肯定的なものや否定的なものに大きく2分されるようだ。肯定的な評価を与えた院生のコメントは、それを裏付ける文で構成されている。

- ・発表への反応を知りたかったから。(7)
- ・自分の発表が果たして、みんなの要求に応えられるものであったか、また内容が適切であったかが分かる、フィードバックである。(7)
- ・事実をより客観的に表すとと思う。(7)

肯定的評価を与えた院生の中にも、提案や当惑等が見られた。

- ・あまり否定的なコメントがないようだ。個人的には改善点についてのコメントが欲しい。(6)
- ・どう評価をしたらいいのか、具体的に知りたい。(6)

否定的評価を与えた院生のコメントは厳しいものが多かった。

- ・他の人が一人でも否定的なことを書いていると、自分の思っていた点と比べると、かなり低い評価を付けることになってしまう。(4)
- ・他の人から評価がもらえるのは有難い。でも、それをもとに自己評価するのはどうかと思う。(4)
- ・コメントから自己評価するのはちょっと難しい。ネガティブな反応があればダメ、ポジティブならOKということだろうか。(3)

この結果も私にとってはショッキングなものだった。この「発表の本番の評価の方法」は、先学期の反省を受けて、今学期新たに始まったシステムだった。私の心の中では「今回の目玉」的な位置を獲得し、「自分としても、なかなかいい方法が見つかったなあ」と自己満足していたので、このような結果は予想していなかった。否定的評価を与えた院生のコメントには、「他人による評価を受け入れること」そして「それに基づいて自己評価すること」への不満が多い。自己評価及び他人（他の院生）による評価に対する抵抗が大きいということは、「評価をする人イコール教師」という形に戻るべきであるということの意味しているのだろうか。様々な形での試みを1年間体験した後でも、院生には「先生なんだから、先生が評価してよ」との思いが強いのか。だとすれば、プロセス・シラバスの本質に立ち戻って、院生

が嫌がる自己評価及び他人による評価はやめて、私だけが評価するシステムにすべきではないだろうか、色々なことが頭の中を駆け巡った。

8. 「最終成績の決め方」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	1	2	4	1	3

この項目も、評価に関する他の項目と同様に、あまり肯定的な評価を院生に与えてもらっていない。数少ない肯定的評価には次のようなものがあった。

- ・自分の意見も反映できるし、先生からの厳しく正確な評価だからいいのではないかなと思う。(7)

- ・レポートについてのコメントをもらえるのがいいと思う。(6)

- ・評価過程がはっきりしていていいのではないかな。(5)

否定的な評価を裏付けるコメントは、次のようなものだった。

- ・話し合いにどんな意義があるのか、あまりよく分かっていません。(5)

- ・意見が合わなかった場合の対処が難しいのでは？(4)

- ・話し合いによる決定に慣れていないため、自己評価が低く成績が悪くなる人もいると思う。(3)

学期中の学習プロセスを振り返ること、そして自分の学習に責任を持つことを目標として導入したこのシステムであるが、2回実施しても、あまり肯定的な評価を得ていない。やはり評価については、従来の伝統的システムを院生は望んでいるのだろうか。

9. 「レポートの分量・内容」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	2	2	4	3

評価への参加で見られたような強い抵抗は、レポートについては見られなかった。肯定的な評価を与えた院生のコメントは、次のようなものであった。

- ・授業で取り上げた内容から、もっと知りたいという気持ちになるものもあったので、この形でいいと思う。字数も適当だと思う。(7)

- ・トピックが与えられるより、自分が興味があることを色々調べて決めていくほうが好きだ。

(6)

否定的な内容のコメントは、様々だった。受けとめ方が個人によって異なっていることが分かる。

- ・量はまあまあと思ったが、テーマを決めるのが難しく、いい方向へ発展しているのか疑問だ。(5)

- ・評価を考えると量の指定は必要かも知れないが、決めなくてもよいのではないかなと思う。(4)

10. 「E-mailによる話し合い」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	1	0	2	2	4	2

肯定的な評価を与えた院生のコメントは、便利さや時間の節約を挙げたものが多かった。

- ・便利で無駄がなくてよかったと思う。(7)

- ・時間の無駄が省けてよかった。E-mailを使用したからこそ、他のクラスメートからのフィードバックを無記名でもらうことが出来てよかった。(6)

その一方で、パソコンを自由に使えない場合の不自由さを訴えるコメントも見られた。

- ・初めは、(5時に閉まる)端末室でしかメール出来なかったのが、時間的に余裕のないときはとても困った。でも今は家でもメール出来るので、今はとてもいい方法だと思っている。(5)

- ・E-mailは大変便利で良い方法だと思うが、メールチェックが日課になっていないので、忘れそうになることもある。あと、夜11時以降は、モデムで大学につながりにくいので、苦労した。(4)

否定的なコメントは、全員が顔を合わせて話し合うことのメリットを挙げていた。

- ・時間的な無駄が省けたかも知れないが、自分が気づかないような意見を聞きながら考えることが出来ないの、考えが広がらないような気がする。(5)

- ・授業時間中は、思いついた意見をすぐに言うことが出来、また他人の意見を聞くことができるので、授業中に話し合いをしたほうがよかった。(2)

「E-mailの活用などにより、更に効率的な話し合いの方法を探していこう」という、先学期の反省か

ら生まれた方法だったが、効率的でよいという意見がある一方で、顔を合わせての話し合いが欲しいという意見があるという結果になった。この2つを組み合わせることで果たしていい方法になるのか、その際のバランスはどうするのか、難しい問題だが、今後自分なりの答えを見つけていきたい。

11. 「プロセス・シラバス」に対する院生の答え

点	1	2	3	4	5	6	7
人数	0	0	0	1	3	3	4

肯定的なコメントは、プロセス・シラバスの特徴が好意的に受けとめられたことを表していた。

- ・初めての経験でとても面白かった。(7)
- ・色々不都合が出てきたときに、自由に意見を言うことが出来、方法の変更も可能という柔軟さがあるので、授業時間を自分達のために使うことが出来る。(7)
- ・しんどいことがあっても、自分達で決めたことだから自分達で責任をとることになり、クラス運営を考える難しさを知ることができた。(6)

その反面、否定的なコメントの内容も、「時間がかかる」「方向性をはっきりしない」「慣れない」等のプロセス・シラバスの特徴に由来するものだった。

- ・最終的には、面白い形の授業になったと思う。そこに到達するまでが長く、その間少しもつたいなかったように思う。(6)
- ・アイデア自体は自分にとって新鮮だったが、方向性をはっきりしておらず、そこが難点だったと思う。最後になってくると、授業パターンが出来上がり、少々マンネリ化してしまったかも。(5)
- ・内容についての達成感がなかった。どこまでやればいいのか分からなかった。(5)

私自身は、「2学期目ともなれば慣れてくるだろうから、プロセス・シラバスの良さを理解してもらえるだろう」と思い込んでいたようだ。先学期、自分の思い込みや無神経さを反省してははずなのに、同じような過ちを再び犯してしまっていたようだ。自分の思い入れが強いものを他の人に紹介する時には、人間はその熱意が無意識に色々な形で出てしまうもので、それ自体は決して悪いものではないと思う。しかし、それを紹介するのが「教師」という、これまでの教育システムの中では学習者よりも高い

位置に置かれてきた人間であれば、学習者はNOをはっきり言えず教師の熱意を受け入れざるを得ない立場にある。このような立場の違いを打破する一手段としての「プロセス・シラバス」の導入だったのだが、それを受け入れる院生側に、新しいものを受け入れるのに必要な時間的そして心理的余裕を十分に与えていたかという、はなはだ疑わしい。1年間で自分の思い通りに持っていきたいという思いが、私の心のどこかにあったのかも知れない。

12. 「将来に向けて改善すべき点」についてのコメント

院生が書いたコメントは、本稿でこれまで見てきた点についてのものが多かったが、それ以外に、内省ノートについてのコメントがいくつか見られた。

- ・授業のスタイルに自分の意見が取り入れられたり、他の参加者の考えが聞ける点がよかったが、時間を手続きにとられすぎたので、手続きを簡単に素早くして欲しい。それから、このアンケートや内省ノートなど、授業外や授業とは異なる作業が多く、筆無精の私には大変な作業だった。書くことが苦手な人への配慮が欲しい。
- ・内省ノートの意図が最近分からない。

院生一人ひとりの学習プロセスを私がしっかりと把握するための内省ノートであり、私にとっては貴重な情報源になっていたのであるが、それが負担になっていた院生もいたことが分かった。私としては、この内省ノートシステムは是非維持したいので、より負担にならない方法を考えていきたい。「負担」について、1人の院生から次のようなコメントがあった。

- ・先生も学生も負担が「少なくはない」と思う。

確かにそうだ。私は私で負担を実感していたのだが、院生は院生で同じことを感じていたのだ。負担を超える学習成果を目指すことの重要性を痛感した。

13. 「私が果たした役割」についてのコメント

プロセス・シラバスを実施する教師としての私の役割についてのコメントの中で、肯定的なものには次のようなものがあった。

- ・発表の準備や本番で先生が色々手伝ってくださるので、先生の援助者としての役割が印象的だ。
- ・他の先生と比べて、学生に多くの自由を与え

ていると思う。

その一方で、教師のより積極的な働き掛けを望むコメントも見られた。

- ・先生はもっと積極的な役割を果たしてもいいと思う。
- ・先生に頼りすぎているかも知れないけど、先生はどう思われているのか、私達のレベルは低くはないのか、もっと聞きたいと思った。
- ・先生から見た我々の発表についてのコメント・改善点が、もう少しもらえたらと思った。

先学期の「教師のより強いリーダーシップや積極的参加を望む声」が少なくなかった。学期初めの交渉で、教師の役割をより明確にしておく必要がある。」との反省を受けて、今学期は学期の最初の授業に私の役割を明確にした。明確にすることで、「自分達の役割を自覚し、より自律的な学習へと移行して欲しい」と院生に期待していたのだが、私のより積極的な参加を望む声は変わらなかった。自律的な学習を進めたいとの私の気持と、教師のより積極的な働き掛けを望む院生の声を両立させることは難しそうだ。しかし、このどちらも重要なことだと私は思うし、なんとか「仲直り」するいい方法を探っていききたい。

以上見てきた様々な結果は、次のようにまとめられるだろう。

1. 「学期初めの先学期の反省に基づいて話し合い」及び「発表者の決め方」は支持された。
2. 「授業の進め方・教師の役割」を1箇月の試行錯誤の末に話し合いで決定するプロセスは、再考の必要がある。
3. 評価への参加についての院生の抵抗は依然根強いものがある。
4. 「レポートの分量・内容」や「E-mailによる話し合い」については、様々な意見がある。
5. プロセス・シラバスそのものについても、様々な意見を院生は持っている。
6. 私のより積極的な参加を望む声は、今回も少なくなかった。

アンケート調査の結果はこのように、評価への院生の参加の是非、私の教師としての役割、またプロセス・シラバス導入の是非そのものについても再考する必要があることを示していた。

おわりに

先学期のアクション・リサーチの継続という形で

実施された今回の試みであったが、個人的には全く満足できない結果となった。それは、上述のような反省点が再び浮上してきたからではなく、このプロジェクトと格闘するのに十分な時間的・心理的余裕が持てなかったことにある。授業・本や論文の執筆作業・学会発表・論文指導・雑務等に追われ、今学期はプロセス・シラバスに関するデータの収集が学期中は十分にできなかった。その結果、その時々で私が考えたり思ったり感じたりしたことの記録がきちんとなされておらず、「とにかく一定期間やってみて、その結果を最後に見る」という、一見「仮説を立て、それを検証する」実証主義的研究の様相を呈しかねないリサーチになってしまった。この点に関して、私は深く反省している。「アクション・リサーチの報告をする者は、行動の結果ばかりを強調するタイプの報告ではなく、アクション・リサーチというプロジェクト全体を通しての自分の成長を具体的に伝えることに重きを置いて、報告することが要求されているのである（横溝 2000b: 223）」と強く主張している私自身なのに、途中のプロセスの大切さに重きをおかず、自分の成長を具体的に伝えることができないリサーチに、結局はなってしまったのだ。今回のリサーチは前回のアクション・リサーチの続編であり、当初は「プロセス・シラバスに関するアクション・リサーチ (2)」というタイトルをつける予定だった。しかしながら、以上のような理由で、このリサーチを「アクション・リサーチ」とは呼びたくないという気持が生じたので、代わりに「プロセス・シラバスに関するリサーチ -これはアクション・リサーチと言えるのか?-」というタイトルにした。「アクション・リサーチにはこうあってほしい」という私の願いを自ら裏切るリサーチになってしまったため、このリサーチをアクション・リサーチとは呼びたくない気持で現在いっぱいなのだ。

私は横溝 (2000b: 233) の中で、「データの収集をどのくらい厳密に行なうのかは、アクション・リサーチを実施する教師の時間的・心理的余裕とエネルギーに左右されます。データ収集のために、授業自体がおろそかになったり、授業に向けるべきエネルギーが著しく減少したりしては本末転倒です。」と述べている。その意味でいえば、授業などの多くの仕事にベストを尽くして取り組んだために、私の時間的・心理的余裕があまりなくなってしまったこと、そして、そんな中で実施されたリサーチが今回のようなリサーチになってしまったのも、ある程度仕方な

いことかも知れない。しかし、ここで仕事の多さや忙しさに負けてしまい、教師としての自己成長を実感し記録し続けることをやめることは何としても避けたい。「自分サイズ」の無理のないリサーチであることはアクション・リサーチでは大切な要素だが、「サイズ」が同じでも内容を高めるために、ちょっとした工夫によって、実施プロセスを少しずつでも記録することは不可能ではなかったはずだ。仕事の面ではこれからも更に忙しくなることが予想されるが、忙しい中でも時間的・心理的余裕を作りだし、教師として自己成長し続けようという心構えを忘れないようにしたい。私とアクション・リサーチとの格闘はこれからも続く。

[注]

1. 本研究は、『広島大学日本語教育学科紀要』第10号(11-20ページ)に掲載された「プロセス・シラバスに関するアクション・リサーチ」に続くものである。
2. プロセス・シラバスとは、言語学習の到達点だけでなく到達するプロセスにも焦点を当てるシラバスであり、ニーズ調査・分析と、それに基づく学習者・教師間また学習者同士の交渉を重視するものである。その交渉がコースの開始時だけでなくコースの途中でも必要に応じて何度も行なわれることや、学習内容/学習の仕方/学習の方向性/評価の方法等の選択に学習者がフルに参加することなどが、その特徴としてあげられる。詳しくは、横溝(2000a)を参照。
3. 先学期の反省については、横溝(2000a:19)を参照。
4. 詳しくは横溝(2000a)を参照。
5. アンケート調査の詳しい内容については、付録1を参照。

参考文献

- 横溝紳一郎(2000a)「プロセス・シラバスに関するアクション・リサーチ」『広島大学日本語教育学科紀要』第10号、11-20
- 横溝紳一郎(2000b)『日本語教師のためのアクション・リサーチ』日本語教育学会編 凡人社

[付録1：：アンケート調査の内容]

- 1：学期初めの「先学期の反省に基づいた話し合い」についてどう思いますか。
- 2：今学期の発表者の決定は、1人が一学期に2回発表ということを決め、自分が発表したい項目を2度挙手するという方法で(話し合いも混ぜながら)なされました。今学期のような形で、発表者を決めることについてどう思いますか。
- 3：授業の進め方と教師の役割については、2つのやり方を試した後、E-mailでどっちがよかったか意見を集め、最終的な決定をしました。このような形で、授業の進め方と教師の役割を決めることについてどう思いますか。
- 4：評価については、「積極的参加」を評価項目から削除することになり、発表(30% X 2)、レポート(40%)と決定しました。このような形で決まった評価の仕方についてどう思いますか。
- 5：評価者(誰が評価をするのか)については、(1)発表の準備は、学生の自己評価による、(2)発表の本番は、その発表についての発表しなかった他の学生からのコメント(匿名)と先生からのコメントに基づいて、学生が自己評価する、(3)レポートの評価は先生による、となりました。このような形の、評価者(誰が評価をするのか)についてどう思いますか。
- 6：評価項目の下位項目と評価基準については、先学期の分を配付して、修正点があるかどうか記入してもらい、その結果に基づいて修正を加え決定しました。このような形の、評価項目の下位項目と評価基準をどう思いますか。
- 7：「発表の本番」については、(1)まず発表直後に自己評価を行なっており、クラスメートのコメントと先生のコメント(ともにE-mailを通して)を参考に、自己評価をする、(2)そして、発表毎(2回)にして自分の自己評価の結果に基づいて、「発表の本番」の評価を行なうこととする、と決まりました。このような形の、「発表の本番」の評価方法をどう思いますか。
- 8：このクラスの最終成績の決め方ですが、先学期同様、学習者・教師ともに各下位項目の評価を済ませ、最終的な成績を話し合いによって決定するという、先学期と同じような形に決まりました。このような形の、最終成績の決め方をどう思いますか。
- 9：レポートについては、量はA4で2-3枚、3000字プラスマイナス1000字、内容は授業でカバーされた項目の中から、各自トピックを選択するという形に決まりました。このような形の、レポートの量と内容をどう思いますか。
- 10：今学期は話し合いのために授業時間を割くことを出来るだけ避けて、E-mailの活用に努めました。このような形の、話し合いの方法をどう思いますか。
- 11：1年を通じて行なってきた「プロセス・シラバス」についてどう思いますか。
- 12：このクラスをより良きものにするために、将来に向けて改善すべき点などありましたら、思い付くだけ(遠慮なく)書いてください。
- 13：このクラスでの先生が果たした役割は、他のクラスのそれとはかなり違っていたと思います。このクラスでの先生が果たした役割について、意見や感想を(正直に遠慮なく)書いてください。